

・緋の房の襖はかたく閉ざれて今日もさびしく物おもへとや
・ほととぎすわれにひとりの君ありといふことさへも忘れて聞きぬ
・たたけどもたたけどもわが心しらずピアノの鍵盤は水の如し (金 鈴)

・ぬばたまのあやめもわかぬ塗料もてぬりつぶさばや来し方のわれ (薫 染)

・死ぬまでも死にてののちもわれといふものの残せるひとすちの路 (白孔雀)

*印を付けたものは、資料館で閲覧できません。

(文化課 辻 正)


資料館だより 信綱先生の父弘綱翁の没後百年と資料館開館五周年を記念して昨年六月二十二日より約一ヶ月間特別展を開いた。歌人・国学者・書家・家庭人分けて四つのコーナーを設けその遺品や著書、自筆の原稿など約百点を展示した。又弘綱・信綱親子が一一十年前松阪から金沢まで旅した様子を記した「加越日記」を辿り撮った写真約四十点(市教委辻正氏撮影)を展示した。又期間中に辻正氏、村田邦夫氏の解説と講演もあった。

来館者には佐佐木由幾さんを始めご一族、「心の花」の会員、文学、短歌の愛好者が全国から見学され、連日盛況であった。
(佐佐木信綱記念館 近藤 淳)

卯の花の里だより 「今年は、信綱の歌碑巡りをしてみよう」と、ワゴン車と乗用車の二台に会員が分乗し、十月二十二日石薬師を出発しました。訪問先は、北勢の朝日町小向神社・同町役場・四日市市小杉町光念寺・菰野町尾高観音・同町湯の山温泉、それに石薬師小学校の六箇所。講師は辻正先生、道案内は石薬師出張所の山崎所長さん。

石薬師女性学級が、佐佐木信綱を学習し始めたのは四年前。村田邦夫氏を講師にお招きし「佐佐木信綱、その人と歌」と題した講演会を開いたのが最初でした。それ以降、信綱が作詞した校歌を集めた校歌集を発刊したり、卯の花と伊勢形紙で葉を作ったり、顕彰歌会に応募したりなど、信綱をテーマの一つに掲げて活動を続けてきています。

歌碑は、建立後かなり年数が経ち、読みづらくなっています。その上に、あの信綱独特の文字です。読み出しの箇所さえ分からないものがいくつもありました。辻先生の説明を受けたり、資料と首っ引きになったりしてようよう判読。光念寺では、佐々木家の家紋である「四目結」を屋根瓦や雨水受けに発見。そういえば佐々木家は、信綱の三代前の利綱が小杉町から石薬師へ移ってきたのです。「佐々木」の姓を名乗られるご住職は「碑の下には、信綱の遺骨が分骨してあるのですよ」と、語られました。信綱と縁のあるお寺さんは、静かなたたずまいの中にありました。
(石薬師地区女性学級代表 清水豊子)

	
目次	座右の書
佐々木か佐佐木か 展示室だより(九條武子書簡) 信綱一首(2) 資料館だより(弘綱翁特別展) 卯の花の里だより(歌碑巡り)	大杉 順 辻 正 村田 邦夫 近藤 淳 清水 豊子
・鈴鹿市教育委員会文化課 (Ⅷ・〇五九三・八二・一一〇〇〇) 〒五二一三 鈴鹿市神戸一八一一八 ・佐佐木信綱資料館 (Ⅷ・〇五九三・七四・三二四〇) 〒五二一三 鈴鹿市石薬師町一七〇七	

座右の書

佐々木 ひさ

大正十五年、私は信綱の長子文綱に嫁ぎました。そして昭和三十八年には父を、六十一年の五月には夫を送りました。夫の死は、楽しみに待っておりました資料館開館式の十日前でございました。現在は、父が四十代の終りに建てた鎌倉の書齋溯川草堂に独り住んでおります。門べの小川に因む森鷗外先生の命名でございました。

この静かな日々が、「歌の家」の人でありながら歌の詠めぬ私に、父の歌書を熟読する時間を与えてくれます。特に自歌自註『作歌八十二年』は文字通り座右の書となりました。五歳から八十八歳まで、作歌に研究に指導に己が志す道をひた歩み続ける充実した生命の記録は驚異としか申せませんが、その行間に潜む孝心・夫婦愛・師弟の情等の細やかさは、子として感動を禁じ得ぬのでございます。

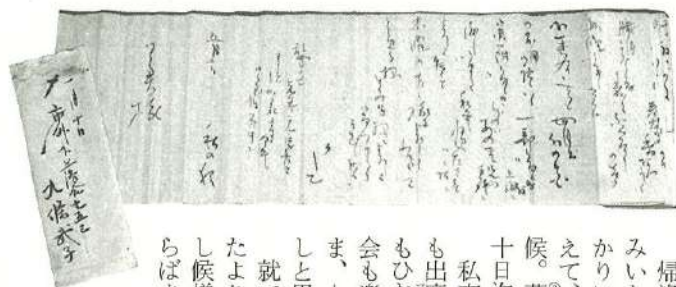
以上憚りもなく書かせて頂いた機会に、父のこよなく懐かしんだ故郷鈴鹿の衣斐市長・市川教育長を始め文化課・資料館・石薬師の皆様へ日頃の御恩情を深く謝し上げます。

佐々木か、佐佐木か 信綱先生の場合、どちらを用いるべきかを毎日新聞が採り上げて話題になったのは去年の秋であった。事情は自叙伝『ある老歌人の思ひ出』に先生自身明記された通り、明治三十七年(一九〇四)三三歳の一月以来、上海で印刷させた紅唐紙大型名刺が佐佐木になっていたの、中国旅行を記念し「尔来自分は佐佐木と書くやうに」なられたのである。従って、それ以前の処女歌集『思草』は佐々木、それ以後の第一歌論集『歌学論叢』は佐佐木である。しかし例外もあって、高弟武井大助氏の執筆した墓碑銘は戸籍通りの佐々木になっている。

昭和十五年の紀元二六〇〇年記念式典で内閣が配布した歴代御製集『列聖珠藻』は謹撰者信綱先生みずから入念を極めた校正に当たられたが、巻末の後記には筆名的な佐佐木を、奥付には戸籍通りの佐々木を用いて明確に使い分けられた。甲子園の放送で映し出された四日市工業高校校歌の佐々木は、作曲者信時潔氏の譜面に書かれていたのに拠ったことが最近になって判明した。なお文中の*印は、実物が資料館に展示してある事を示す。

(文化課課長 大杉 順)

展示室だより 当資料館には、信綱ゆかりの学者・歌人・文人・画家・芸能人・政財界知名士などの書簡を数多く所蔵している。今回は、「憂愁の歌人」とうたわれた名門出の才媛、九條武子の手紙を紹介したい。



⑧ 帰洛後御無沙汰申あげ候処、御ふみいたゞき恐入候。御庭の牡丹まさかりに候よし、もみちの若葉に色はえて、ひとしほと存ぜられまゐらせ候。藤田様の御都合にて、藤波会を十日迄にの御事、うけたまはり候。私事、十日ならば、なにとかしても出漕出来ぬこともなかるべしとおもひおりて、御新築も拝見いたし度、会も楽しいものひとつに御座候ま、九日の夜行にて帰候はばよろしと思ひをり候。

就ては、三十日出藤瀬様よりの御たよりまあり、十三日に御きめ遊ばし候様に仰せられ候。もし十三日ならばまことに私も都合よろしく、嬉しうぞむじ候。

奥様よりの御手紙は、二十七日出にて御座候ま、其あとにていよいよ御定め遊ばし候ものかと存じ候が

いかゞ。とく御返事申上候筈のところ、十日頃に令女会の總會をいたすやうの話も聞きおり候間、その方尋ね合せ、交渉いたしおり候為、日を重ね誠に延引に相成御ゆるし願上候。

御題は旅と、いま一題はなににて候や、恐入候共、御葉書にて御一報いたゞけ候はゞ、ありがたくまゝ詠ひいたし願度候。(——線の部分七文字は、意味不明)
支那はまことにおもしろく、弘子様にも度々御目にかゝり、まことに御気色よく、御丈夫そうに見あげられ候。御すまゐのあたりも、御話のたねにと、よそながらまわりまゐり候。つきぬおはなしは、いづれ御まのあたりと、たのしみをり候。折角御身御大切に願ひ上度、師の君にもよろしく御申しあげねがひ上候。

とかく古郷にまゐり候へば、足にをもちがつき、帰ることがいやにあいなり、こまりをり候。こゝのわたり、鳥辺山の若葉の香なつかしく、朧月かすかな森に、ふくろうの声毎晩いたしをり候。

恐れ入り候へども、四月号心の花御不用御座候はゞ一部いたゞき度、上海にご送付いたゞき候ものは、あのまゝ兄の手許に渡し、いまだ私事拝見いたさず御座候。よろしく願上候。木曜の方々様によろしく、わけてとめ子様、とみ子様によろしく、御なつかしう存じ居候。かしこ乱筆にて先生にこんな字書きましては、しかられます。何卒ごらむ後 火中に

五月二日 秋の夜 御奥様

小解 ・この手紙は、大正十二年五月二日(封筒は一月十日のもの)付、信綱夫人雪子に宛てたもの。そのためか文面も女同士の気安さから、巻紙の上端にひとすじ濃い紅色が染められている。①帰洛 京都に帰る。武子の正式の居住場所は、京都西本願寺内錦華殿。②御庭 東京本郷西片町の信綱宅、玄関前の小さい植え込みのこと。③藤田様は歌人藤田富子、歌集『藤のうら葉』等。④藤浪会 大正十二年二月、同門柳原白蓮の上京を機に、山縣有朋の別荘椿山荘を主会場として催された竹柏会女流歌人の勉強会の呼び名。⑤藤瀬様 歌人藤瀬秀子。歌集『楓の下蔭』等がある。⑥令女会 未詳。⑦支那は 大正十二年四月、生母円明院と上海に兄光瑞を訪ね、上海・蘇州・杭州に遊ぶ。⑧弘子様 信綱二女。河野一郎に嫁して当初上海千愛里に住む。「九條武子夫人書簡集」の中で信綱は、『當時弘子は、上海千愛里に住んでいた。武子は吾らに語り聞かせたため、その街のわたりを、わざわざ訪ねてくださった。夫人の好意、感謝にたへず』と記している。「上

海の開北の家の新妻の吾子は夕餉のまうけなどすらむ」信綱五〇歳。⑨鳥辺山 平安朝以来の火葬場。武子の住んでいた大谷に近い。「さびしさは吾がすき心たそがれの鳥辺の山をなつかしみ来つ」武子。ふくろう 「雨近げにかぐろき雲の走る夜をうしろの山のふくろふの声」 武子。⑩木曜の方々 西片町における毎週木曜の稽古日に集まる人の意か。⑪とめ子様 歌人渡辺とめ子、歌集『高原』等。⑫とみ子様 前出の藤田富子。⑬しかられます 特に親交のあった夫人の雪子に甘えての口語調。随想集『竹柏漫筆』の「九條夫人の思ひ出」は名文である。⑭秋の夜 武子のペンネーム。尾崎行雄の紹介による出会い、命名のいきさつなど、『ある老歌人の思ひ出』に詳しい。⑮御奥様 信綱の内助者雪子。多数の女弟子たちから母とも姉とも敬慕された。「火中に」なども、親しさの現れといえよう。

九條武子五首選 武子の歌集には、金鈴・薫染・白孔雀の三冊がある。今回はそれらの中から五首を選んでみた。

信綱一首・2

いつまでもいつまでもわが舟を
見る寂しきか秋は湖畔の女

大正十一年(一九二二)刊第三歌集『常盤木』から。ただし、全集本信綱歌集では『銀の鞭』所収。大正三年十月、箱根の湖での作。信綱門下には婦人が多く、従って自然に、女性にはある距離を保つことが身についていた。この歌も「寂しい女」を詠んだのではない。「秋の寂しさ」が主題である。(村田邦夫)